

函館高専 学校だより

第221号

令和8年3月発行



独立行政法人国立高等専門学校機構
函館工業高等専門学校



学校だより 221号 (令和8年3月)

目次

- 卒業・修了される皆さんへ..... P 1
- 卒業生に贈る言葉..... P 2
- 担任教員・卒業生から..... P 3
- 修了生に贈る言葉..... P 8
- 修了生からの言葉..... P 8
- 留学生からの言葉..... P10
- 学校行事・イベントについて..... P11
- 各種大会・コンテスト等での活動..... P14
- 国際交流報告..... P29
- 春潮寮通信..... P31
- 国際棟通信..... P32
- 進路支援室から..... P33
- 退職される先生方から..... P34
- 新任職員紹介..... P35
- 函館高専地域連携協力会から..... P36

卒業・修了される皆さんへ

——「函館高専」という型を破り、自らの人生を鑄造せよ——



函館工業高等専門学校
校長 清水 一道

本日、函館高専の学び舎を後にされる卒業生、そして専攻科を修了される皆さんに、心からのお祝いを申し上げます。また、今日まで学生たちを温かく、時に厳しく支えてこられた保護者の皆様、ご家族の皆様にも、深く敬意を表し、お慶び申し上げます。

私が本校の校長として着任し、皆さんと過ごした時間は決して長いものではありませんでしたが、キャンパスで見かける皆さんの真剣な眼差しや、実習に打ち込む姿から、私は確かな「函館高専の魂」を感じ取ってきました。

私の専門は「鑄造」です。鉄を溶かし、型に流し込み、新しい形を造り出す。このプロセスは、皆さんが歩んできた高専生活そのものに見えます。入学当時の皆さんは、いわば熱い情熱を秘めた「湯（溶けた金属）」のような存在でした。それを本校という「型」に流し込み、五年間、あるいは七年間の年月をかけて、じっくりと冷やし固め、技術者としての骨格を形作ってきました。

しかし、本日をもって皆さんは、その住み慣れた「型」から外に出ることになります。鑄物（いもの）が型から取り出された瞬間、そこにはまだバリが残り、表面は荒削りかもしれません。それで良いのです。大切なのは、ここから皆さんが自分自身をどう「研磨」し、どのような製品として社会に貢献していくかです。

皆さんがこれから飛び出す社会は、予測困難な「VUCA」の時代と呼ばれています。生成AIの急速な普及、カーボンニュートラルへの転換、そして人口減少。正解のない問いが次々と現れるでしょう。その時、立ち返ってほしいのは、函館という厳しい、しかし豊かな自然の中で培った「現場力」です。

「理論」は頭の中にあります。が、「答え」は常に現場にあります。迷ったときこそ、自分の手を動かし、現場に足を運び、物事の本質を見極めてください。函館高専で磨いた「実学の精神」は、いかなる荒波の中でも皆さんを支える強力なコンパスとなるはずです。

最後になりますが、皆さんに一つだけ約束してほしいことがあります。それは「学び続けること」を止めないでほしいということです。材料工学の世界では、不純物が混ざることによって強度が上がる合金があります。皆さんも、自分の専門外の知識や、異なる価値観を持つ人々との出会いを恐れしないでください。多様な経験を自らに取り込み、変化し続けること。それこそが、皆さんの人生という「合金」をより強く、より輝かせる唯一の方法です。

皆さんの前途には、無限の可能性が広がっています。函館高専の卒業生であることに誇りを持ち、自信を持って歩んでください。皆さんの活躍を、私たちはこのキャンパスから、いつまでも応援しています。

卒業、並びに修了、本当におめでとう。



祝・卒業！

教務主事 山本 けい子

修了生、卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。心からお祝い申し上げます。

また、皆さんが函館高専で学び、大きく成長してくれたことに心より感謝しています。

高専生活はどうでしたか？ 入学したての頃は長いと感じた卒業までの道のりも、振り返ってみればあっという間だったのではないのでしょうか。それほどに、年を重ねるにつれて月日の流れるのが早く感じられるものですね。

皆さんは、在学中、座学や実験・実習、レポート作成を通じて、知識や技術を修得し、基礎を積み上げてきました。教員室前で夜遅くまで勉強する姿、実験・実習で多くの仲間と協働する姿、研究活動で何度も悩み、試行錯誤を繰り返し乗り越える姿。こうした一つひとつの努力や経験が、皆さんを成長させてきました。

また、学校生活を通じて、「チーム高専」としての基盤も築いてきました。友人との信頼関係、先輩後輩との繋がり、そして先生たちとの関わり。こうした人間関係のネットワークこそが、皆さんの最大の強みであり、生涯の財産でもあります。これからも大いに活用していきましょう。

4月からは新生活を迎え、忙しい日々となるでしょうが、一段落したら、近況を報告しに来てください。専攻科や大学での学びの様子、仕事で経験したこと、成功したことや失敗したことなど、成長の続きを聞ける日を楽しみに待っています。また、皆さんの頑張っている姿は、教員にとって誇りであり、在校生にとって最高の励みとなります。

それから、皆さんが卒業を迎えることができた陰には、支えてくれた家族の存在があったことと思います。学校卒業を機に、ぜひ感謝の気持ちを伝えてください。その感謝の気持ちが、皆さんのこれからの人生の土台となります。

最後に、皆さんは「函館高専の卒業生」です。学校で学んだことを大切に、学校で培った知識や技術に自信を持ち、本校の一員としての気持ちを忘れずに、それぞれの分野で活躍してくれることを期待しています。

正直、少し寂しい気持ちもありますが・・・卒業を心から誇らしく思っています。皆さんの人生が、輝き続ける素晴らしいものであることを願っています。



しっかり生きて！

生産システム工学科機械コース
第5学年学級担任 鈴木 学

卒業おめでとうございます。さて、餞の言葉として皆さんにアドバイスをしたいと思います。これから進む将来を決めたのはあなたです。『あなたが始めた物語』だからこそ、最後まであなたが責任をもって進んでください。その時大事なものは、『覚悟』を決めることです。覚悟とは先のわからない真っ暗な道なき荒野に進むべき道を切り開くことです。大変だったり、怖かったり、苦勞もたくさんあるかもしれません。どうか覚悟を決めて、これからの自分の物語を紡いでいってください。そんな日々頑張っているあなたの姿を見て、励ましてくれる人や手を貸してくれる人もきっと現れるはずですよ。そして、健康第一でどうか元気で『しっかり生きて』いってください。

鈴木先生はこれからもずっと函館高専にいますので、機会があれば顔を出してくれれば嬉しいです。そのときは、皆さんが経験してきた物語をたくさん聞かせてください。その日が来るのを楽しみにしています。

最後になりますが、これまで本クラスを指導してくれた教職員の皆様、そして温かく見守ってくださった保護者と地域の皆様に厚く御礼を申し上げます。



遊んだもん勝ち

生産システム工学科機械コース
第5学年 工藤 龍之介

2021年に入学して早5年。入学時は長いと思っていた高専生活も今思うと短いものでした。入学してから2か月経って始まったオンライン授業、対面授業の見通しもつかず友達とも会えず正直不安ばかりでした。それでも友達とグループ通話を繋いで楽しくやっていたのはいい思い出です。対面授業が始まってからは活気のある友人たちに恵まれて退屈を感じることはない学校生活を送ることができました。2年以降は専門教科や製図の課題、実験レポートに追われながらもギリギリのラインで生き長らえてきました。在校生(特に機械コース)の皆さんに伝えたいことは「製図の課題以外、提出締切前日から始めて間に合わない課題は無い」ということです。諦めないこと、これ大事なんだよなあ。そもそも締切前日まで課題を溜めなくて、コツコツ勉強しましょう。

高専で5年間好き勝手遊んでいましたが非常にあっという間な最高に楽しい時間でした。周りのみんなのおかげで入学してから今まで、ひたすらに刺激の強い日々を送ることができました。関わってくれた方々、本当にありがとうございました！



「やれば良かった」よりも
「やっちゃった」の後悔を

生産システム工学科電気電子コース
第5学年学級担任 森谷 健二

電気電子コース9期生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。卒業式で皆さんの名前を読み上げられることを本当に嬉しく思います。皆さんからパワーをもらえて、本当に楽しい担任期間でした。卒業すると言っても、まだエンジニアの卵から孵化したばかりの雛です。これから色々な経験をして人間としてもエンジニアとしても成長すると思うと楽しみで仕方ありません。成長した姿を見せにたまに遊びにきてください。

学生達について最近思うことは、失敗をしたくない、答えが合っているかを知りたい、という傾向が強いということです。しかし、人生の決断や社会では「こうした方がベター」はあっても「これが正解」ということはありません。経験則と情報、他者の協力、様々な観点で最終的に自分で決断します。と言うことは、たくさん学んで、多くの経験をした方が良いのです。知と経験は力なり。色々やってみてください。何にでも挑戦してください。いっぱい勉強してください。あとからやっておけばよかったと思うくらいなら、あーやっちゃったの後悔の方がずっと良いです。迷ったら動いてみてください。

これからも、健康第一で何事も全力で楽しんでください。最後にもう一度、卒業おめでとう!!



誠意

生産システム工学科電気電子コース
第5学年 下田 大夢

五年間の学校生活を振り返ってみると、入学した頃に想像していたよりも時間は意外なほど早く過ぎていきました。長いと思っていた五年も、授業や実験、課題に追われる日々の中で、気づけば終わりが近づいています。だからこそ在校生の皆さんには、今過ごしている一日一日を大切にしてほしいと思います。特に意識してほしいのは、授業にきちんと出ることです。電気電子コースでは、回路や電磁気、制御など、授業で扱う内容が目に見えにくく、最初はイメージしづらいため理解が進みにくいと感じることも多いと思います。しかし、出席して話を聞き、手を動かしながら学び続けることで、少しずつ内容が繋がっていきます。成績や結果だけにとらわれず、学ぼうとする姿勢を大切にしてください。そして課題や実験など、やるべきことをやっていれば、その姿勢は必ず先生方に伝わり、困ったときには必ず助けてくれます。五年間は本当に早いです。後悔のない学校生活を送ってください。



贈る言葉

生産システム工学科情報コース
第5学年学級担任 圓山 由子

情報コースの皆さん、そして保護者の皆様、ご卒業おめでとうございます。

2022年4月の始業式に当時2年生の皆さんの前でご挨拶したのがついこの間のことのようにです。

学校行事や日常の何気ないやり取りの中で皆さんとの大切な思い出を作ることができました。なかでも、高専祭での思い出は印象深いものでした。3年生での校舎の装飾、4年生での学科展示、5年生の模擬店。どれも皆さんの思いと地道な努力の成果が表れていました。皆さんと共に4年間情報コースの一員として過ごせたことを誇りに思います。

皆さんはこれからそれぞれ新しい世界に旅立っていきます。時には大きな壁に挑まねばならないこともあるでしょう。私は、皆さんであれば、必ず乗り越えていけると信じています。ちょっとしんどいなと感じた時には、母校を頼ってくれればと思います。私もできる限り力になろうと考えます。

これからの皆さんの人生が実り多いものであることを願っております。



5年間を終えて

生産システム工学科情報コース
第5学年 金澤 慈大

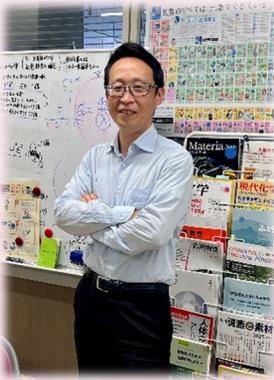
早いもので、この学校に入学してから5年が経ちました。入学当初は右も左も分からず、不安を抱えながらのスタートでしたが、課題や実験にお互い助け合って向き合う中で、多くの出会いや経験に恵まれました。「高専生同士は仲がいい」とよく耳にしますが、あれは本当ですね。一人ではとても乗り越えられないような壁（課題）を、皆で協力し合って乗り越えてきたからこそ、クラス全体の仲も自然と深まったのだと思います。

また、4・5年生での文化祭では、学校行事にドライな反応を示しがちな高専生が、クラスで一致団結して協力し合っていたのが印象的でした。あの瞬間、確かにクラスが一つになっていました。長い間、同じ仲間と学び、過ごせたことは、私にとってかけがえのない財産です。

これからはそれぞれ違う道を歩んでいくこととなりますが、ここで過ごした時間や共に乗り越えた経験は、きっとこれからの支えになると思います。それぞれの場所で、自分なりに前に進んでいきましょう。

最後に、これまでお世話になったすべての皆さんに、心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

担任教員・卒業生から



伸びしろしかない 卒業生の皆さんへ

物質環境工学科
第5学年学級担任 水野 章敏

物質環境工学科・第9期生の皆さん、そして保護者の皆様、ご卒業おめでとうございます。担任を務めた2年間、皆さんは学業、研究、課外活動、学校行事において大いに活躍してくれました。さまざまなコンテストや学会での優秀賞受賞、そして高専祭のクラス模擬店総選挙での第1位獲得など、記憶に残る成果が数多くありました。その一方で、活躍の場をなかなか見出せず、カードゲームに興じているところを見つけては、4度も没収されてしまった人たちもいます（卒業式で返却しますね）。周囲の活躍を目の当たりにして、思うように力を出し切れなかったと感じている人もいるかもしれません。しかし、皆さんはまだ20歳になったばかりです。焦る必要はありません。モチベーションをうまく保てれば、この先は「伸びしろ」しかありません。函館高専で身に付けた知識や経験を活かし、それぞれの場所で自分らしく歩んでくれることを願っています。そして、活躍していても、そうでなくても、いつでも顔を見せて来てください。



高専での学びと思い出を胸に！ ～新生活に向けての抱負～

物質環境工学科
第5学年 鹿角 謙人

卒研発表も終わり、残るは学年末試験。高専生活もあと僅か。いくつもの思い出が頭をよぎる。一コロナ禍の真っ只中で、オンライン授業の連続だった頃。コロナ収束の兆しも見え、留学生歓迎会やクリスマスパーティーを開催した3年。思わぬハプニングもあったけど乗り越えた学科展示。そして5年、一番の思い出はやっぱり高専祭！「グランメゾン章敏」でパンケーキを焼き続け、模擬店総選挙1位を獲ったときは本当に嬉しかった！最後の関門は卒研発表。遅くまで残って発表練習に明け暮れたのも今では良い思い出だ。

そんな楽しかった高専生活も終わり、春からは大学生。地元を離れての一人暮らしに正直、不安はある。そんなときに思い出すのは、小説「汝、星のごとく」の北原先生の言葉。

—「自分で自分を養える、それは人が生きていく上での最低限の武器です」

当たり前なことじゃないか！と思う人もいるかもしれない。だけど、“誰かに依存する”ことなく、自分の力で生きて自身の決定に責任を持つ。これはすごく大切なことだと思う。それに、僕には高専で学んだ専門知識という強力な武器もある。そして忘れられない5年間の思い出も。これらを胸に新しい環境でも前に進み続けたい。



卒業生へ贈る言葉

社会基盤工学科
第5学年学級担任 菊池 幸恵

社会基盤工学科第9期生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。皆さんが2年生の時から4年間担任として一緒に過ごしてきました。ここまでやってこられたのは、クラスの皆さんや保護者の皆様、学科の先生をはじめたくさんの教職員の方々のお陰です。心より感謝申し上げます。

この4年間の中では、担任として、悲しいこと、腹立たしいこと、等の思い出も結構ありましたが、今思い出すのは、なぜか皆さんが一生懸命に頑張っている姿や弾ける笑顔ばかりです。

これからは就職や進学という輝く未来が待っています。自分が得た知識や技術をもって社会に貢献し、自分の道を切り開いていかねばなりません。その歩みは時には小さいかもしれないし、時にはとっても大きいかもしれません。止まることもあるかもしれません。でも、あなたたちなら大丈夫！この社会基盤工学科の荒波を乗り越えて卒業できたのです！！これからの人生に対しても切り開くことができるでしょう！！

皆さんの前途が光り輝くものになることを心から祈っています。なによりも、体に気をつけて、感謝の心を忘れずに毎日を過ごしてください。



あっという間の学校生活

社会基盤工学科
第5学年 山口 真希

こんにちは。社会基盤工学科の山口真希です。高専に入学した当初は5年間は長く感じるのかなと思っていましたが、この5年間はあっという間に感じました。入学した当初は、ちゃんと勉強についていけるか、社会基盤工学科は課題やテスト、実習が大変なので不安なことも多くありました。テストは科目数が多く、暗記科目もあるので大変な部分も多くあります。また、実習も暗くなるまで測量を行うこともあったので大変でした。しかし、先生がたがとても優しく教えてくださるので分かりやすく学ぶことが出来たと感じています。5Zのクラスは賑やかで時には先生に迷惑をかけたこともあると思うのですが、全体的に明るいクラスのみんなで協力したりしながら楽しく過ごすことが出来たと思います。

在校生の皆さんには、5年間はあっという間だと思うので、今の時間を大切にしながら少しでも思い出になるような学校生活を過ごしてほしいと思います。また、学年関係なくさまざまな人と繋がりを作ってほしいと思います。

最後に、これまで関わってくださったすべての方にとっても感謝しています。本当にありがとうございます。

修了生に贈る言葉 ～専攻科長から～



専攻科修了 おめでとう ございます

専攻科長 宇月原 貴光

令和7年度専攻科2年生のみなさん、専攻科修了おめでとうございます。専攻科2年間の課程を修め、晴れて修了証書が授与されたことを心よりお祝い申し上げます。みなさんは函館高専での7年間の学生生活を終え、大学院へ進学する人、企業で技術者として活躍しようとする人、それぞれに思い出のある学生生活ではなかったかと推察しています。

学校を卒業すると勉強しなくてよい、ということはありません。社会に出てから勉強は継続していかなければなりません。また、海外で働くことはあたりまえの時代になってきています。長い人生のなかでは色々な困難が待ち受けていると思います。そのようなときも、前向きに考え立ち向かってください。

これからの世界は変化の激しい予測困難な時代です。10年前の2015年に現在のような世界情勢になるのが予想困難であると同様に、これから5年後、10年後の世界も予測困難な時代です。グローバル化の波のなかで新たな時代を築くのは皆さんです。これからの社会を支える原動力となるよう、皆さんの活躍を大いに期待しています。

修了生からの言葉



あっという間の学校生活

生産システム工学専攻
第2学年 能登谷 夢月

あっという間に高専生活が過ぎ、修了になりました。15歳のときに体育館で緊張しながら入学式を迎えた日が懐かしいです。最初は高専に進学という進路があることすら知らなく、自分が専攻科に行くとは思いませんでした。専攻科では授業や課題の他にも学会や就職活動があったので本科のとき以上に悩み、考えることの多い学生生活でした。専攻科の授業は自分たちで考えるような正解のない課題があって本科との違いを感じていました。振り返ると大変なことも多かったですが、その一つ一つが今の自分をつくっていると感じます。そして、専攻科の愉快的な仲間たちと過ごした時間は、高専生活の大きな支えであり、忘れられない思い出です。先生方、高専本科から専攻科までの長い間、学業だけでなく進路や研究面でも親身にご指導いただき、本当にありがとうございました。先生方の支えがあったからこそ、ここまで成長することができました。

最後にこの場をお借りして高専生活でお世話になったすべての方々に心より感謝申し上げます。

修了生からの言葉



P.S. これからラッキーピエロと
離れなきゃいけないんですか？

物質環境工学専攻
第2学年 奥村 頌白

早いもので、函館という地に降り立ってから7年の年月が経ちました。ここで思い出を熟々と書くよりも、これを読む皆さんに私自ら体験した、失敗して欲しくないことがあります。専攻科の受験を視野に入れているかたは是非お読みください。

それは、専攻科の入試日（学力）です。私の場合は専攻科の入試日が例年よりも1ヶ月程度早くなると知らず、第一志望の大学が受けられなくなってしまいました。皆さんの場合は大丈夫ですか？提出物は全部揃っているか、ちゃんと提出されているかの確認はお忘れなきよう。しかしながら、専攻科に進学したことは失敗だとは全く考えていません。寧ろ、様々な体験ができ満足のいく進路を決定できたので、良い選択だったと思います。少しばかり後悔があるとするのであれば、専攻科の内容に納得がいくレベルでは打ち込めなかったことです。なので、そこをうまく出来るようにする秘訣も教えます。

まずは太陽にあたること、特に少しでも陽の光が当たる部屋を持つことです。そして、自分に自信を持つこと、慢心は身を減ぼしますが自信を持たなければ何事もうまくいきません。がむしろにやった中のただ1つの成功体験でも構わないので、その成功体験を大切にしましょう。もはや自分が好きと胸を張って言っちゃいましょう。言霊です。



専攻科修了にあたって

社会基盤工学専攻
第2学年 田中 丈大

函館高専から入学してから5年、高専の専攻科に入学してから2年の計7年間、長期にわたり函館高専で過ごしました。この7年間を振り返ると、社会や私を取り巻く環境が大きく変化していることを否が応でも突きつけられます。

専攻科では、元々私がプログラミングに興味があったこともあって、プログラミングによる解析主体の研究を行っていました。1年生の頃は戸惑うというか混乱することばかりでしたが、次第に慣れていき、最終的には少し良い結果を出すことができました。どうやったら実行時間が短くなるだろう？プログラムをクラッシュさせないためにはどうすればいいだろう？こんなことを考えながらコードを書くことが楽しかったです。心残りは、一定の成果をあげるまでに時間がかかったために、不完全な結果となってしまったことです。私は4月から社会人ですが、反省を生かして日々を過ごして行けたらと思っています。

最後になりますが、7年間本当に楽しい日々を過ごさせていただきました。本当にありがとうございました。



思いがけない「恵」

生産システム工学科情報コース
第5学年留学生 アイッツ

私が初めて函館に来たとき、正直とても寒く、最初は不安とつらさを感じていました。勉強へのやる気もあまり出ませんでした。授業が始まると気持ちは少しずつ変わっていきました。日本人の学生たちが優しく声をかけてくれ、言葉や生活面でも支えてくれました。最初はすべてが日本語で大変でしたが、友達の助けのおかげで少しずつ慣れ、高専での生活はとても充実したものになりました。私はアーチェリー部とバスケットボール部に入り、他の学生と一緒に練習し、日本の学校生活を普通の学生として経験することができました。中でも高専祭で模擬店を運営した経験は特に印象に残っています。留学生として過ごしたこの3年間に後悔はなく、後輩のみなさんには今の時間を大切に、楽しめるうちに思いきり楽しんでほしいと思います。



The Bittersweet of Hakodate Kosen

生産システム工学科情報コース
第5学年留学生 ケビン

函館高専に在学していて、まず感じたのは先生方がとても優しいということです。授業や研究のことだけでなく、生活面についても気にかけてくださり、留学生である私にとってとても心強い存在でした。

また、スポーツ大会や高専祭などの行事が多く、部活動やイベントを通して学校生活がとても充実していると感じました。勉強だけでなく、人とのつながりや思い出を作る機会がたくさんあり、高専ならではの良さだと思います。実際に、イベントを通してタイとの交流会にも参加することができ、他国の文化に触れる貴重な経験になりました。

校内の設備がきれいで整っている点も印象的でした。キャンパスが広く、校内を歩くだけでも楽しく、実験室や教室などの学習環境も充実しているため、安心して勉強に集中することができました。

学校が坂の上にあるため、生活は少し大変だと感じることもありました。しかし、その分、函館にある学校だからこそ見られる景色や、四季折々の自然の美しさを知ることができました。また、函館は食べ物がとてもおいしく、海産物をはじめとした食文化も、学生生活の大きな楽しみの一つでした。この立地や環境も、今では良い思い出の一つです。

さらに、国際交流の機会が多く、さまざまな国の友達と出会うことができました。日本人の学生も外国人の学生もとても優しく、温かく迎えてくれたおかげで、安心して充実した学校生活を送ることができました。



学校行事を振り返って

学生主事 平沢 秀之

令和7年度も多くの行事が開催されました。ここでは学生会が主体となって企画した学校行事について振り返ってみたいと思います。学生会は会長（4SJ森田滋さん）を筆頭に学生会役員のみなさん方による自治会を組織し、一致協力して各種行事の企画立案から運営まで行っています。コロナが蔓延していた時期は多くの学校で様々な行事が中止となり、コロナが収束した後も行事運営のノウハウが引き継がれなかったため、行事開催が困難であったと聞きます。幸い、本校では学生会と教員らがこれまでの伝統や体制を引継ぎ、行事開催への取り組みをスムーズに行っています。

新年度のスタート時に1年生に部活・愛好会活動を紹介する目的で「新入生勧誘イベント」が開催されました。第1回目を4/17に、第2回目を4/25に2回に渡り開催され、第1体育館と第1講義室に各部、各愛好会のブースを設け、活発に活動紹介を行いました。1年生にとっては課外活動を選択する良い機会になりました。

6/18には「体育祭」が開催されました。定期試験のストレスを発散する機会にもなり、団体競技・個人競技への参加、応援で大いに盛り上がりました。特に部活対抗リレー、学科対抗リレーでは白熱して盛り上がりました。

8/8には「全国大会壮行会」が開催されました。北海道地区予選で勝利を収めた団体・個人が九州地区で行われる全国高等専門学校体育大会へ出場するためのエールを贈るイベントです。選手のみなさんは在校生からの大いなる期待を背負って全国大会に臨みました。

10/25から2日間にわたり「高専祭」が開催されました。今回のテーマは、『滾』（たぎる）です。学生一人ひとりの想いが滾り、高専祭を盛り上げ、大きな熱気となるようにとの願いが込められています（文化局長のことば）。学外からも大勢の来客があり、学科展示、部活動の模擬店など盛況に開催され、最終日に花火打ち上げで幕を閉じました。

12/26には「学生会役員選挙」が実施されました。令和8年度役員への立候補者は、会長：古澤碧基（3Z）さん、会計：石川和毅（3Z）さん、古澤琉威（2SJ）さん、会計監査：速水俊太郎（3Z）さん、福原衣吹（2SE）さんの5名で、選挙の結果、5名とも信任されました。



体育祭



高専祭

我が青春の集大成、高専祭

令和7年度学生会長
生産システム工学科情報コース
第4学年 森田 滋

全国高専交流会で全国の学生会役員と意見交換をして、分かったことがあります。なぜかは分かりませんが、学生会が中心となって高専祭を運営するのは北海道の高専くらいだったということです。他高専では基本的に、高専祭実行委員会にモチベーション、決定権、ノウハウがあります。したがって、函館をはじめとした道内4高専の学生会は、他高専の学生会が担う業務の他に高専祭という学内で一番大きなイベントを運営する必要があります。その分、負担もとても大きいと言えます。4年生の学生会役員は高専祭終了後に引退となります。高専祭は僕達にとって最後の大事な仕事でした。

さて、今年度の高専祭のテーマは「滾」（たぎる）。エネルギーで活気あふれる高専祭を目指しました。5年生、部活動、愛好会、留学生による模擬店、昨年度の新企画で大成功した模擬店総選挙、クオリティの高いステージパフォーマンス、コロナ後最大規模の大抽選会、高専祭のフィナーレを堂々飾る花火…と楽しい企画が勢ぞろいでした。特に今年のステージパフォーマンスは多くの新機材を揃え、業者にも見劣りしないような演出を目指しました。具体的にはムービングライトを導入、担当者が事前にプログラミングすることで、より高度な演出を実現することができました。出演したバンド達からもなかなか好評で、力を入れて良かったと感じました。

今年度高専祭は、昨年度に比べ様々なトラブルに見舞われました。物価高の影響で取引先の見積もりが予算を超えてきたこと。直前にインフルエンザで学級閉鎖になるクラスがあり、ステージパフォーマンスや学科展示に影響が出てしまったこと。大抽選会の抽選番号を書くはずのうちのわが届くのが遅れ、抽選会当日にやっと届いたこと。しかし、後輩達の機転の利いた対応により、なんとか全ての問題をクリアし、高専祭を終え、引退することができました。高専祭に参加した学生に楽しかったと言ってくれたことが何よりも励みになり、報われました。町内会の方々や、高専に進学を考えている親子連れなどにもお越しいただき、高専が地域の一員であることを再確認しました。是非、これからも規模を縮小することなく、盛大に高専祭が開催されることを望んでおります。

最後に、学生主事の平沢先生をはじめとした学生委員会の先生方、学生会顧問の鳴海先生にはご支援いただきましたこと、誠に感謝申し上げます。



ガールズオープンキャンパス2025

女子学生支援室長 松永 智子

令和7年11月8日（土）にガールズオープンキャンパス2025を開催しました。ガールズオープンキャンパス（GOC）は女子学生とその保護者を対象としたイベントで、6回目となる今回は、函館市内外から40名の参加がありました。参加者には、生産系実験「電子オルガン講座～電子オルガンを組み立てて演奏してみよう～」、社会基盤系演習「ダ・ヴィンチ橋をつくろう」を体験してもらいました。また、高専校内をめぐるキャンパスツアーでは、宮武先生と蛸子さんのご協力の下、水工学実験室を見学し、津波の発生メカニズムを体験しました。季節を少し先取りした、クリスマスツリーを模った光るキーホルダーも恒例のお土産になりました。

本イベントでは、本校女子学生が案内役・講師役を務めますが、今年も学生主体で事前準備から当日の実験指導までしっかりやり切ってくれました。上級生の頼もしいリードの下、2・3年生も次世代リーダーとして成長し、生き生きと講師役を務めることができました。このような女子学生がキラキラ輝く姿は、函館高専GOCの一番の見どころです。キャンパスツアー終了後は、参加中学生と本校の女子学生が同じテーブルを囲んでざっくばらんにトークに花を咲かせました。はじめは緊張した様子の中学生も、トークが終わる頃にはすっかり打ち解けて高専女子モードになっており、終了時間をお知らせするのが少しためられるほどでした。この他、GOCでは希望者には寮見学も受け付けています。女子寮の教室や食堂など、春潮寮での生活環境を入寮者以外が実際に見ることができるのは実質この時だけです。

2020年に始まった函館高専GOCですが、実験隊の女子学生にもじわじわとGOC出身者が増えてきて嬉しく思っています。終了後のアンケートには、保護者の方から「校長先生のお話しや各学科のガールズの方たちのお話しが丁寧親切でとても良い学校だと思いました。」といったものや、中学生から「実験してみて色々なことに興味が湧きました。第一志望なので入学するのがとても楽しみになりました！」「先輩方に質問をした時、気軽に答えてくれて、すごく安心しました！！」などのコメントがあり、掴みはバッチリのイベントとなっています。10周年を迎えた理系女子実験隊。来年もますます存在感を高めていきたいと思えます！



化学実験体験の様子

各種大会・コンテスト等での活躍について

令和7年度全国高等専門学校体育大会等での学生の活躍

学生主事 平沢 秀之

令和7年度の全国高等専門学校体育大会は、北海道地区予選が7月に、全国大会が8月から9月にかけて開催されました。ラグビーの全国大会は令和8年1月に開催されました。地区予選では道内の4地区(函館、旭川、釧路、苫小牧)に分かれて開催され、函館地区では野球、ソフトテニス、バレーボールの3競技が行われました。全国大会は九州地区の高専が主幹となり、福岡・熊本・長崎・大分・宮崎・鹿児島および沖縄の各県で開催されました。ラグビーは神戸での開催となりました。

(1) 令和7年度全国高等専門学校体育大会等の上位入賞競技

種目	日時・会場	団体名・団体名	成績
陸上競技 男子110H	8月29日(金)～8月30日(土) 大分スポーツ公園 クラサスドーム大分	2SM 佐々木 郁哉	全国第1位(優勝)
陸上競技 男子走幅跳	8月29日(金)～8月30日(土) 大分スポーツ公園 クラサスドーム大分	4SM 川口 斐脩	全国第3位(入賞)
陸上競技 男子三段跳	8月29日(金)～8月30日(土) 大分スポーツ公園 クラサスドーム大分	4SM 川口 斐脩	全国第2位(入賞)
陸上競技 女子100H	8月29日(金)～8月30日(土) 大分スポーツ公園 クラサスドーム大分	2Z 池田 操	全国第2位(入賞)
テニス競技 男子ダブルス	8月26日(火)～8月28日(木) パークドーム熊本 熊本県民総合運動公園	1-1 羽鳥 鉄生 1-4 大谷 舜	全国第2位(準優勝)
女子バスケットボ ール競技	8月30日(土)～8月31日(日) 久留米総合スポーツセンター	女子バスケットボール部	全国第1位(優勝)

各種大会・コンテスト等での活躍について

(2) 令和7年度全国高等専門学校体育大会等出場競技及び出場学生

種目	日時・会場	出場学生
ハンドボール	9月19日(金)～21日(日) 佐世保市体育文化館	○団体 沖野作(3SM), 柴田一護(3C), 小坂祥悟(2C), 新谷理真(2Z), 中野大河(2C), 齊藤圭吾(2Z), 佐藤瑠泉(2C), 櫻井千畝(2C), 菊池奏汰(2Z), 石川裕貴(1-4), 佐久間龍之介(1-2), 砂子侑哉(1-2), 田中瑛翔(1-1)
バスケットボール	8月30日(土)～31日(日) 久留米総合スポーツセンター	○女子団体 三浦結翔(5SM), 三浦結菜(5SJ), 佐藤夕波(5Z), 阿部來暉(5Z), 寺尾香梨奈(5SM), 浅利日菜子(4C), 谷内華(3SM), 亀谷桜月(3C), Bagenda Ai(3Z), 浅利涼葉(2C), 菱沼琴葉(1-1), 長川陽向(1-5)
テニス	8月26日(火)～28日(木) パークドーム熊本 熊本県民総合運動公園	○男子ダブルス 羽鳥鉄生(1-1), 大谷舜(1-4)
ソフトテニス	8月26日(火)～28日(木) パークドーム熊本	○女子団体※道内4高専合同 林奏弥(3SE), 笹森蓮華(3Z) ○女子ダブルス 林奏弥(3SE), 笹森蓮華(3Z)
陸上	8月29日(金)～30日(土) 大分スポーツ公園 クラサスドーム大分	・男子4×100mR 佐々木郁哉(2SM), 地主湧(3SM), 川口斐脩(4SM), 山本尊琉(4SM) ・男子4×400mR 佐々木郁哉(2SM), 地主湧(3SM), 川口斐脩(4SM), 山本尊琉(4SM) ・男子走幅跳 川口斐脩(4SM) ・男子三段跳 川口斐脩(4SM) ・男子110H 佐々木郁哉(2SM), 山本尊琉(4SM) ・男子走高跳 佐々木郁哉(2SM), 地主湧(3SM) ・男子やり投 地主湧(3SM) ・女子走幅跳 池田操(2Z), 鈴木穂(4SM) ・女子100H 池田操(2Z)
ラグビー	令和8年1月4日(日)・ 5日(月)・7日(水)・9日 (金) 神戸総合運動公園ユニバー 記念競技場	中野名惺(5SJ), 藤澤大道(5Z), 福田翔太(5Z), 野呂悠真(5SJ), 関谷泰我(5SJ), 西山海斗(5SJ), リンユウ(4SE), 村田悠希也(3SE), 今西光太郎(2Z), 円馬睦仁(2SM), 田壘歩汰(2SM), 花村諒(2Z), 鈴木暉士(2C), 藤浪雄太(1-2), 庭田陸(1-3), 野呂弘翔(1-3), 小野寺俊太(1-4), 小松巧(1-4), 田中雄清(1-5)

各種大会・コンテスト等での活躍について

2025年のテニス部（硬式）活動報告

硬式テニス部顧問 牧之内 友

今年は経験者含めて1年生が一挙に7名も入部して活気づいた一年でした。

久々に高体連への参加となり、5月13日（火）～15日（木）に行われた函館支部予選では男子団体戦優勝、個人戦シングルスで羽鳥鉄生が優勝、大谷舜が3位、高尾慧音が5位、ダブルスで羽鳥・大谷組優勝と、三冠を達成しました（いずれも1年）。6月初めに帯広で行われた全道大会の壁は厚く、団体戦はベスト8まで行ったものの、個人戦はともに初戦または2回戦で敗退しました。

第61回北海道地区高専体育大会のテニス競技は釧路で、7月12日（土）・13日（日）の日程で行われました。団体戦優勝、個人戦シングルスは大谷が優勝、羽鳥が準優勝、米村有生（電気電子5年）がベスト4、ダブルスは羽鳥・大谷組が優勝、米村・高尾組が準優勝となり、団体戦・個人戦ともに全国大会への切符を手に入れました。団体戦は4連覇となります。

第60回全国高専体育大会は熊本で、8月26日（火）～28日（木）の日程で行われました。ちょうど8月半ばの水害があった後で、天候不順もありましたが無事開催されました。

なお、今大会は記念大会ということで、ふだんはオープン種目の女子団体戦が正式種目として実施されましたが、本校からの選手はおりませんでした。

さて、団体戦は初戦を突破しましたが2回戦で鈴鹿高専に惜敗しました（鈴鹿高専は優勝）。個人戦シングルスの大谷は本校として久々に初戦を突破したものの2回戦で敗退。男子ダブルスの羽鳥・大谷組は初戦で昨年の準優勝ペアを破ると、そのまま決勝へと勝ち上がり、宇部高専の同じく1年生ペアと対戦しました（こちらも準決勝で昨年の優勝ペアを破ってきました）。結果は6-8で惜しくも敗れましたが、準優勝でした。

本校としては過去最高の成績です。昨年部の存続が危ぶまれていた状況から一転しました。しかし「勝って兜の緒を締めよ」です。来年にも期待です。



各種大会・コンテスト等での活躍について

積み重ね

女子バスケットボール部元部長
第5学年 三浦 結翔

平素より女子バスケットボール部の活動にご理解とご支援をいただき、ありがとうございます。今年度の全国高等専門学校体育大会において、私たちは優勝という大きな成果を収めることができました。この結果は、私たち部員だけの力では決して成し得なかったものであり、日頃から支えてくださった多くの方々のおかげです。この場を借りて感謝申し上げます。

スポーツにおいてまず目につくのは結果で、勝負の世界では結果が全てと言われがちです。しかし私はその中で過程を大事にしていきたいと常に思っています。一例として、バスケのスコアシートに残るのは主にファウルと誰が得点したかです。しかし、その得点はゴールを決めた人だけで成り立っているものではありません。ボールを運んだ人、アシストをした人、ディフェンスを崩した人、さらにいうとオフェンスができているのはディフェンスを頑張った人やリバウンドをしてくれた人のおかげです。これと同じように、今回優勝を果たすことができたのも、試合中だけ頑張ったからではありません。先輩方に教わった時間やみんなと何気なく過ごしてきた他愛もない時間、蒸し暑い体育館でダッシュをした時間。ひとつひとつが重要で、その瞬間にしか経験できないことです。この積み重ねが大きな結果に繋がったと思っています。決勝のブザーが鳴った瞬間のあの感動は一生に残る思い出です。

この全国優勝という結果は一つの通過点に過ぎませんが、この経験を通して得た学びや感謝の気持ちは忘れることはありません。これまで築き上げてこられた先輩方や、どんな時も向き合ってくれた顧問の方々、いつも一番近くで応援してくれた保護者の方々、これまで支えてくださった全ての方々に感謝の気持ちで胸がいっぱいです。

高専の5年間は長いように感じます。でも実際卒業を目の前にして、率直に“あつという間だった”という感情が湧き出てきます。“次もあるから”というのは当たり前ではありません。一日一日の練習が後に結果を大きく左右します。後輩には人とのつながりを大事に、今日の前にあるチャンスに全力で挑んでほしいと思います。

今後も女子バスケットボール部は目標に向かって日々努力していきます。これからも変わらぬご支援とご声援をよろしくお願いいたします。



各種大会・コンテスト等での活躍について

令和7年度全国高等専門学校体育大会バドミントン部

バドミントン部顧問 古俣 和直

高専体育大会のバドミントン競技は、男子競技・女子競技でそれぞれ団体戦・個人複戦・個人単戦の3種目があり、北海道地区大会から勝ち上がっての全国大会出場権は6種目のそれぞれ一位にのみ与えられます。釧路市で開催された令和7年度地区大会での函館高専の成績は、男子団体戦2位、女子団体戦3位、個人戦男子複戦最高3位、個人戦女子複戦最高2位、個人戦男子単戦最高3位、個人戦女子単戦最高1位でした。その結果、函館高専からは個人戦女子シングルス優勝の奈良青衣さん1名が全国大会出場となりました。9月5～7日に熊本県八代市で全国大会は開催され、開会式では歴史的にバドミントンの盛んな地域であり、また歌手の故八代亜紀さんの故郷でもあると話されていました。8月10～11日には記録的大雨により八代市内は土石流、浸水にみまわれ、私たちが着いた日も、鹿児島県近海の海上で台風が突如発生し、ギリギリその台風を回避する航空路変更で阿蘇くまもと空港へ到着できました。大会開催中の天気は回復し、連日熱中症警戒アラート発令中の炎天下を徒歩で体育館へ通いました。過去に平成21年福岡市開催の全国大会で、函館高専バドミントン部は男子団体戦で準優勝したことがあり、九州地区での大会には良い縁を感じています。当時10連覇中の北九州高専に準決勝で下馬評をひっくり返す大金星を上げての準優勝でした。その時のメンバーでも前年度の全国大会では目立つ成績は残せなかったのは、日本バドミントン協会第1種大会に認定されているバドミントン競技大会であり、厳密なルール・大会運営の下での試合なので、その雰囲気の中でも実力を100%発揮するには、経験が必要と思われます。1学年の奈良青衣さんは、当然、高専体育大会全国大会へは初出場です。高専大会経験が豊富な上学年の対戦者を相手に大健闘しましたが惜敗。大会成績としては初戦敗退になりましたが、次年度大会での好成績につながるための貴重な経験を積んだと思われ、来年度大会も期待大です。



各種大会・コンテスト等での活躍について

第52回全国高等専門学校ハンドボール選手権大会

ハンドボール部顧問 藤原 亮

本年度の大会は、昨年度の地元・函館開催とは異なり、九州（長崎県佐世保市）での開催となりました。普段とはまったく違う環境での試合となり、特に暑さは大きな壁となりました。体育館内は湿度が高く、汗で手にボールがつかず、思うようにキャッチやシュートができない場面も多く、選手たちは慣れない状況への対応を求められました。

昨年度は惜しくも優勝候補の豊田高専に敗れ、悔しさを胸に一年間の練習に取り組んできました。しかし今年度は、4・5年生の引退によりチーム構成が大きく変わり、1～3年生だけで日々の練習や他校との練習試合に臨む体制へと移行することになりました。身体的にはまだ成長途中で、プレーの強度や当たり負けなど課題は残るものの、自分たちで主体的に練習内容を考え、課題に向き合う姿勢が徐々に育っていきました。5月の高体連で1勝を挙げられたことは大きな自信となり、「自分たちの力で戦い、結果をつかむ」という意識で臨んだ全国大会でした。

今年度の専体協はトーナメント方式。負ければそこで終わりという中、初戦の相手は明石高専でした。序盤から相手にペースを握られ、立て続けに得点を許してしまいます。それでも選手たちは声を掛け合いながら守備を立て直し、前半終了時には逆転可能な差までリードを詰めることができました。ここまでは、暑さに苦戦しながらも集中力を切らさず、練習してきた守備の粘りを発揮できた場面だったと言えます。

しかし後半、気温と湿度の影響や、相手との体格差による体力の消耗が徐々に見え始め、集中を切らし、攻守の切り替えが遅れる場面が増えていきました。焦りも重なり、パスミスやシュートの精度が落ち、相手に再びリードを広げられます。なんとか踏ん張ろうとするものの、最後は気持ちがプレーに追いつかず、悔しい初戦敗退となりました。

それでも今回の大会は、若いチームが自ら考えながら成長してきた一年の成果を確認する機会であり、今後の部の体制をつくる上で非常に大きな経験となりました。今の1～3年生がこの悔しさと経験を忘れず、来年度に向けてさらに主体的に練習へ取り組んでくれることを期待しています。応援して下さった保護者・卒業生・教職員の皆さまに、心より感謝申し上げます。



各種大会・コンテスト等での活躍について

陸上競技部 2名がインターハイ出場

陸上競技部顧問 塚本 弘樹

全国高校総体（インターハイ）陸上競技大会が、7月24日から30日まで広島県・ホットスタジアムフィールドで開催されました。本大会は記録的な猛暑の影響を受け、競技日程の大幅な変更や、フィールド競技における試技数の制限など、例年とは異なる運営が行われました。選手にとっては調整が難しい大会でしたが、その一方で100mでは高校新記録が誕生するなど、記憶に残る素晴らしい大会でもありました。

本校からは男子110mハードルに佐々木郁哉（機械2年）、女子棒高跳びに池田操（社会基盤2年）が出場しました。本校陸上部としては、昨年の川口斐脩（機械4年）に続き2年連続での出場となりました。全国の高専の中でも複数名が出場した学校は2校のみで、男女両方が出場したのは本校だけでした。

佐々木は183cmの身長を活かした勢いのあるハードリングが特徴です。高校のハードルは高さ106cmと電車の改札機ほどあり、多くの選手が適応に苦勞しますが、彼は早い段階で自然に対応していきました。自身の動きを細かく分析しており、スマートフォンで撮影した映像を繰り返し確認する姿は周囲が心配になるほど熱心です。今年度は全道3位、専体協全国大会では同種目で優勝しています。

池田は高い身体能力を生かした競技力が特徴で、女子棒高跳びでは道南記録（一般を含む）を保持しています。専門は棒高跳びですが、100mハードル、400mハードルでも全道トップレベルの成績を残しており、昨年の専体協全国大会では専門外の走り幅跳びで優勝しました。実は競技を再開したのは昨年8月であり、そこから約1年で複数種目において結果を残しています。

インターハイでは2人とも全道大会での勢いそのままに、積極的に勝負に臨みましたが、入賞には届きませんでした。全国大会特有の雰囲気の中で、準備や対応に甘さが残る部分もあったのかもしれませんが、2年生で全国の舞台を経験できたことは、今後に向けた大きな財産となったと考えています。

今シーズンは旭川、広島、大分、三重と各地で試合を重ね、2人とは延べ1か月ほど遠征を共にしました。長い時間を過ごす中でも、競技力は未だ成長過程にあると感じ、今後の活躍への期待が膨らみます。このような競技者と時間を共有できることを、指導者として幸せに思います。

来年のインターハイは滋賀で開催となります。本気で日本のトップ争いをしようと日々練習に励んでいます。私自身その挑戦を全力でサポートできるよう努力する所存です。本年度の陸上部の活動にご尽力いただきました、全ての皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。



各種大会・コンテスト等での活躍について



令和7年度 春高バレー 3年連続全道大会出場！

男子バレーボール部顧問
劔地 利昭

令和7年11月4日～6日、14日に、JVA第78回全日本バレーボール高等学校選手権大会北海道代表決定戦（春高バレー全道大会）が「北海きたえーる」にて開催されました。函館高専男子バレーボール部は、10月11日・12日に行われた函館地区大会において第2位となり、3年連続となる全道大会出場権を獲得しました。

地区大会決勝リーグの函館中部高校戦では、第1セットを19-25で落としたものの、第2セットを26-24で競り勝ち、続く第3セットも勢いそのままに25-22で勝利しました。選手たちは緊張感あふれる白熱した試合を展開し、見事に全道大会への切符を手に入れました。年度当初に掲げた「全道大会で一勝」という目標の達成に向け、まずは出場権を得られたことに安堵するとともに、選手たちの意欲は一層高まりました。

全道大会の会場である「北海きたえーる」での試合も3回目となり、会場への移動や試合への入り方も落ち着いて臨むことができました。昨年は実施されなかった開会式での入場行進にも参加でき、良い思い出となりました。試合は2日目第6試合で旭川工業高校と対戦し、第1セット16-25、第2セット19-25で惜しくも敗れました。しかし、狙いとする攻撃や守備を随所に発揮することができ、前回の全道大会と比べても内容は確実に向上しており、その分、悔しさも大きい試合となりました。

試合後、ホテルに戻ってミーティングを行い、一人ひとりが率直な思いを語り合いました。長時間に及びましたが、非常に充実した有意義な話し合いとなりました。私自身も高専バレー部のOBとして、部活動で大切にしていることがあります。高専は高校とは異なる環境にあります。だからこそ「自分たちが主体的に考え、調べ、聞き、話し合い、強くなる」ことを重視し、選手たちの提案を尊重しながら活動を支えています。話し合いの結果、部活動を休む決断をした部員もいましたが、自らの人生を自ら選択することは尊重すべきことです。残ったメンバーで、さらに強いチームづくりに取り組んでいきます。

現在、高専体育大会に向けて全国大会出場、そして全国優勝を目標に日々活動を続けています。来年度は新入生への積極的な声かけを行い、部員を増やし、高体連への出場、そして4年連続の全道大会出場を目指して努力していきます。

これを読んでいる学生の皆さん、初心者も大歓迎です。私たちと一緒にバレーボールをしませんか。保護者の皆様におかれましても、ぜひお子様にお勧めいただければ幸いです。仲間と同じ目標に向かって切磋琢磨する時間は、かけがえのない学生生活を彩る貴重な経験となります。まずは気軽に体育館へ見学にお越しください。

最後になりますが、これまで選手・チームを支えてくださった保護者の皆様、OBOGの皆様、学生の友人、教職員、そして関係して下さったすべての皆様に心より感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

各種大会・コンテスト等での活躍について



学校の垣根を越えて挑んだ 全国高専大会

ソフトテニス部
第3学年 笹森 蓮華

私たちソフトテニス部は今年度熊本県で開催された全国高専大会に参加しました。今年は大会が60回目の節目を迎えたことから、記念として女子の団体戦が新たに実施されました。団体戦は最低3ペア・6人で出場できますが、北海道内では一校のみで女子団体を組めるほどの人数が揃わないため、函館・苫小牧・旭川の三校合同で北海道地区団体チームを結成し、それぞれ1ペアずつ参加しました。北海道の女子選手は普段から交流が盛んで、地区大会では大会の合間などコートを使える自由時間には、他校の学生とペアを組んで試合形式の練習を行うなど、学校の垣根を超えた関わりが生まれていました。今回の熊本での全国大会でも試合以外でも一緒に観光するなど共に過ごす場面が多く、仲の良さがより一層感じられました。

全国高専大会では一日目に個人戦、二日目に団体戦が行われました。個人戦では思うようなプレーができず、悔しい結果となりましたが、全国大会ならではの緊張感を体験し、他高専の選手から多くの学びを得ることができました。戦術やボールの回し方など、今後の練習に活かせる点が数多くありました。二日目の団体戦では、これまでの練習や地区大会での交流を踏まえ、学校に関係なくペアを組んで試合に臨みました。対戦相手は九州・沖縄地区でしたが、前日に全国の雰囲気をつかんでいたこともあり、臆することなくコートに立つことができました。試合中は団体メンバー同士で励まし合い、終始良い雰囲気で行うことができました。私は旭川高専の学生とペアを組み、練習も数回しか行っていない中で強豪相手に6ゲームまで競り合い、最終ゲームまでもつれ込む接戦となりました。結果は惜しくも敗戦でしたが、準優勝のチームを相手に善戦できたことは大きな自信となりました。

今回の大会参加にあたり、他高専の学生や先生方、練習に協力してくれた部員たち、中津川先生をはじめとする四人の顧問の先生方、学生課や応援して下さった多くの先生方に支えていただきました。結果としては課題も残りましたが、みなさんのおかげで全国の舞台で伸び伸びとプレーすることができました。高体連主催の大会には出場できなくなりますが、高専大会にはあと二年間参加できるため、これからも努力を重ね、より良い結果を残せるよう頑張っていきます。今回関わってくださった皆さまに感謝申し上げます。



各種大会・コンテスト等での活躍について

高専ロボコン2025 ～Great High Gate～ 全国大会出場

ロボット研究会顧問 隅田 真一郎

今年のテーマは「Great High Gate」。ロボットでパイロンを移動させたあと、ボックスを積み上げてゲートを作り、人が乗った台車と一緒にそのゲートを通過し、ゲートの高さを競うという競技内容でした。

地区大会は函館高専を会場に開催され、多くの保護者の皆様や地域の方々にご来場いただき、熱い声援を送っていただきました。予選リーグでは、BチームがAグループを1位通過、AチームがBグループを2位通過し、準決勝でAチームとBチームが対戦する展開となりました。この試合に勝ったBチームが決勝へと駒を進め、決勝では旭川Aチームと対戦し、最後まで諦めずに健闘しましたが惜しくも準優勝となりました。（余談ですが、旭川Aチームはご存じの通りこの後、全国大会優勝を果たしました！）一方、Aチームは準決勝で敗れたものの、今大会の競技課題へのチャレンジを評価していただき、審査員推薦枠で全国大会への出場が決定しました。4・5年生と1年生中心のAチームはもちろん、3年生と2年生中心のBチームも大きく成長した姿を見せ、どちらも今後につながる試合内容だったと感じています。

全国大会までのおよそ2カ月間、限られた時間の中ではありましたが、チームを編成し直し、ロボットを改良し本番に臨みました。今回のロボットの最大の特徴は、吸引機構でボックスを掴み、さらに車体を左右に展開してゲートの柱2本を同時に掴んだ状態で全方向移動ができるという点です。「地区大会では達成できなかったゲート通過を、全国大会では必ず成功させる」という強い意志を感じさせるロボットになりました。

そして迎えた全国大会。昨年の悔しさを晴らすべく、一年ぶりに決戦の舞台・両国国技館へ足を踏み入れました。組み合わせ抽選の結果、第3シードとなり、1回戦を勝ち上がった鈴鹿高専との対戦となりました。

試合直前までロボットの調整を行い、昨年度悔しい思いをした原因でもある無線混信への対策も万全に整え、今のチームで出来るベストな状態で試合に臨むことができたのではないかと思います。スタートエリアから動けなかった昨年の悪夢が頭をよぎる中、試合開始と同時に勢いよく走り出したロボットに、チームからも会場からも歓声が上がりました。まずはパイロンを移動し、吸引機構でボックスを掴み、その後、積み上げたボックスの柱を2本のアームで掴んで移動…と順調に進んでいたのですが、機構の動作が不完全だったことから、移動中にボックスを落としてしまうアクシデントが発生してしまいました。鈴鹿高専もパイロン移動による得点で同点でしたが、相手の方が積み上げたボックスの高さが上回っていたため、無念の敗退となりました。

昨年度の悪夢を乗り越え、確かな一步を踏み出すことができた一方で、全国で勝つためにはまだ課題が多いということも実感した大会となりました。今回の経験を糧に、来年度は更にパワーアップした姿を見せてくれることと思います。今後ともロボット研究会への応援・ご支援を、どうぞよろしくお願いいたします。

大会当日、会場で熱い声援を送ってくださったご家族の皆様、函館高専同窓会関東支部の皆様、清水校長先生をはじめ教職員の皆様、また大会参加に際しご支援をいただきました函館高専地域連携協力会、株式会社函館どつく、有限会社ヤマサン濱田水産の皆様にも、心より御礼申し上げます。また、日頃よりロボット研究会の活動にご理解・ご協力いただいている皆様方にも、この場を借りて感謝申し上げます。

各種大会・コンテスト等での活躍について

<北海道地区大会>

(1)チームA (プロジェクト名: Great Hako Date) 結果: 審査員推薦【全国大会出場】
HONDA賞

選手: 【4SE】網本、門脇、【4SJ】麻生
ピット: 【5SJ】加藤、【4SE】白杵・熊木・小板、【1-2】藤浪、【1-4】手塚、
【1-5】高島・川村

(2)チームB (プロジェクト名: 函館高専ズ) 結果: 準優勝
CEMEDINE賞

選手: 【3SM】佐々木、【3SE】児玉、【3SJ】吉野
ピット: 【3SJ】小圖子・杉本・平野、【3SE】木田・杉田、
【2SJ】大内・古藤・篠田

<全国大会>

函館高専 (プロジェクト名: Great Hako Date) 2回戦敗退 (1回戦シード)
函館高専 15 - 15 鈴鹿高専
(審判判定により鈴鹿高専の勝利)

選手: 【4SE】網本、門脇、【4SJ】麻生
ピット: 【4SE】熊木、小板、【3SM】佐々木、【3SJ】杉本、【2SJ】篠田



各種大会・コンテスト等での活躍について

高専オープンイノベーションチャレンジ2025に参加して

大会引率 須藤 絢

今年度、本校の学生チームが 高専オープンイノベーションチャレンジ (KOI) 2025 に参加し、全国から選抜されたチームの中で最優秀賞を受賞しました。本コンテストは、アフリカ地域が抱える社会課題をテーマに、高専生の技術力と創造力を活かした解決策を提案する全国規模の取り組みであり、最終審査では英語によるプレゼンテーションが行われました。国内外の専門家が審査員として参加する中での発表は、学生にとって大きな挑戦となりました。

本校チームは、セネガルの主要産業の一つである水産業に着目しました。セネガルでは近年、漁獲量の減少に悩まされている一方で、漁獲量に依存した「量の漁業」から十分に脱却できず、漁業従事者の収入が不安定であることが大きな課題となっています。そこで本チームは、単に多く獲るのではなく、魚の品質を高めて付加価値を創出する「質の漁業」への転換を目指し、重曹による魚体運動抑制を利用した鮮度保持技術による水産物の高付加価値化を軸とした解決策を提案しました。

企画立案にあたっては、直接現地の日本食レストランやコンサルティング会社にコンタクトを取り、課題の背景や現地の生活実態、流通の実情を丁寧に調査しました。その上で、技術的な新規性だけでなく、現地で実際に導入可能かどうかという実現可能性を重視した点が高く評価されました。

そして、2025年9月に実際にセネガルを訪問し、現地漁師や市場関係者、輸入会社へのインタビューを通して課題の理解を一層深めるとともに、提案内容に基づく実証実験を実施しました。現地関係者との対話を重ねながら、提案の有効性や今後の課題を検証し、社会実装に向けた貴重な知見を得ることができました。

自ら考え、調べ、多くの人と主体的に関わりながら、言語や文化の異なるセネガルという国で活動した経験は、学生一人ひとりにとって今後の人生における大きな財産になるものと考えられます。

今回の受賞は、学生一人ひとりの努力に加え、日頃の授業や探究活動を通して培ってきた問題解決力の成果です。本校では今後も、社会課題に主体的に向き合い、国内外で活躍できる実践的技術者の育成に取り組んでまいります。



各種大会・コンテスト等での活躍について

COWNECTがJST主催 “STI for SDGsアワード” で次世代賞を受賞!

大会引率 阿部 勝正

国立研究開発法人 科学技術振興機構（JST）が主催する2025年度 “「STI for SDGs」アワード”（後援：文部科学省）において、アントレプレナーシップ同好会に所属する物質環境工学科2年生・5年生のグループ「COWNECT（カウネクト）」の取り組みが『次世代賞』を受賞しました。

「STI for SDGs」アワードは科学技術・イノベーション（Science, Technology and Innovation : STI）を用いて社会課題を解決する日本発の優れた取り組みに対して表彰されるもので、地方自治体、民間企業、大学等、公益法人・NPO等の非営利法人、教育機関等、幅広く様々な団体から応募が寄せられます。

「COWNECT」は、様々な要因から離農が進んでいる酪農家さん達を救いたい、という想いのもと『酪農乳業界の正常化を行う牛乳由来の本革風素材事業』をテーマとし、副産物として余剰生産される脱脂粉乳から『革風素材』を開発・製品化に取り組みできました。利用用途が限られている脱脂粉乳の高付加価値化事業を実現することにより、酪農家の不安定な経営状況を構造的に解決することを目指しています。今回の発表では「① 酪農業界が直面している経営面の課題に向き合っている ② 低利用資源である脱脂粉乳をサステナブル素材にリサイクルしている点 ③ 高専生らしい専門性を生かし、大学進学後もその先の事業化まで見据えて研究を継続する意思を持った将来性の高い取り組みである点」が高く評価された結果の受賞となりました。本アワードで高専の取り組みが受賞するのは、函館高専が初めてとなります。

今年度、「COWNECT」はこの受賞のみならず、本田技研工業株式会社（Honda）が実施する“起業を目指す個人の事業開発を支援するインキュベーションプログラム「IGNITION CHALLENGE 2025」”へ採択されました（物質工学科5年生 西野快さんが「優秀賞」を受賞）。また、（一財）バイオインダストリー協会が主催する“SDGs動画コンテスト2025「SDGsの達成に貢献するバイオエコノミーとバイオテクノロジー」”では「優秀賞」を受賞するなど、活躍の一年となりました。

どのプログラムにおいても、継続的な課題解決への取り組みとビジネス展開の域に達している点が高く評価され、実現化に向けた更なる発展が期待されています。



各種大会・コンテスト等での活躍について



第70回北海道吹奏楽コンクール での演奏

吹奏楽部顧問／指揮者
倉山 めぐみ

令和7年8月28日～31日に札幌コンサートホールkitaraにて実施された、第70回北海道吹奏楽コンクール大学小編成の部に函館代表として参加してまいりました。本年度より、中学生の部、高校の部の地区大会からの代表校が大幅に増大したため、本校吹奏楽部が代表となった大学小編成の部は、大会3日目の夜の演奏となりました。結果は、残念ながら銅賞でしたが、春から夏休みにかけて行った日々の練習の結果が発揮できた演奏となりました。

本大会に参加するためには、函館地区大会に参加し、函館地区代表とやらなくてはならないのですが、例年、この地区大会が前期期末試験の真っ只中にあり、部員は赤点を取らないように試験勉強をしながら、顧問も試験の作業に追われながら練習を行い、何とか参加している状況です。この地区大会のために、4・5月から選曲、練習を重ね、当日も午前中から練習したうえで、函館市民会館にて演奏し、本年度も金賞を頂き、函館代表として選ばれました。

高専は、大学生年齢の部員がいるため、全国吹奏楽連盟の規定にて「大学」として位置づけられています。また、テレビ番組でご存知の方も多いかと思いますが、吹奏楽コンクールでは必ず、金賞・銀賞・銅賞のどれかの賞がつくのが習わしとなっています。

実は．．．過去（昭和の時代から参加していますが）には函館地区大会にて金賞を頂いているのはもちろんのこと（コロナ禍で参加できなかった期間を除く）、北海道吹奏楽コンクールの函館地区代表（A編成で参加したときを除く）として金賞を頂いていることもある、結構、優秀な部活であった時期もありました。このときも、試験とコンクールが被り、短い時間での練習や試験期間の日曜日の夜の演奏、ちょうど暑い時期での練習、練習場所を探して転々と．．．など、いつの時代も変わらず、7・8月の練習は悪戦苦闘しています。

本部活では、北海道吹奏楽コンクールにて金賞をもらえるよう日々練習をしています。が、楽しい音楽の時間であることも忘れずに、活動してします。過去に吹奏楽をしていた学生の皆さん、部員になって、一緒にコンクールや演奏会に参加してみませんか？勉強の、研究の息抜きに、楽しい音楽の時間を過ごしてみませんか？

各種大会・コンテスト等での活躍について

第4回高専防災減災コンテストで 三菱電機エンジニアリング賞を受賞

大会引率 下郡 啓夫

令和8年1月24日（土）、つくば国際会議場で開催された「第4回高専防災減災コンテスト」最終審査会において、本校チームが三菱電機エンジニアリング賞を受賞しました。

本コンテストは、国立高等専門学校機構、防災科学技術研究所、国際科学振興財団が主催し、全国の高専生が地域の防災課題に科学技術で挑む取り組みです。書類審査を通過した10チームが半年間の検証期間を経て最終審査会に臨み、当日は多くの来場者が見守る中で活発な質疑応答が交わされました。

本校からは、竹内一花さん（2年社会基盤工学科）、横林栗乃さん（2年生産システム工学科情報コース）、大塚仁瑛さん・北村賢汰さん・中山暁さん（いずれも5年生産システム工学科機械コース）の5名が出場し、「ココロボ×電波でつながる函館プロジェクト～函館高専×FMいるかから始まる防災ネットワーク～」と題して提案を行いました。

プロジェクトでは、高齢者が災害時に安心して避難できるよう支援する「愛着型避難誘導ロボット」の開発と、地域のコミュニティFM局「FMいるか」と連携した防災ネットワークの構築を目指しました。FMいるかは日本初のコミュニティ放送局として開局し、釧路沖地震や北海道胆振東部地震で重要な役割を果たしてきた実績があります。この地域資源とロボット技術を組み合わせ、広域的な情報伝達と個別支援を両立させた点が特徴です。

審査では、養護老人ホーム永楽荘での丁寧なニーズ調査に基づき、ロボットの役割や機能を現場目線で検討した姿勢が高く評価されました。また、デザインに函館タータンを採用するなど、地域性を大切にされた点も印象を強めました。さらに、高齢者の避難行動の傾向やラジオ利用率の高さといった先行研究を踏まえて提案を構築したことが、説得力のある発表につながりました。

今大会のチームは2年生と5年生による異学年・異分野混成チームで、社会基盤・情報・機械と異なる専門性を持つメンバーが、半年間の活動を通して互いの強みを生かし合いました。積極的に議論を重ねながら協働し、一つの提案としてまとめ上げた姿は、本校の学びの実践力を象徴するものです。今後は「函館モデル」として地域での実証実験を進め、より実効性の高い防災支援の仕組みづくりに挑戦していく予定です。



挑戦の扉を開こう！函館から世界へ一歩、未来へ一歩！

グローバルセンター長 藤本 寿々

高専機構は、「世界で活躍できる技術者ニグローバルエンジニア」の育成を目指し、令和6年度から全51高専を対象を拡大して「グローバルエンジニア育成プログラム」を展開しています。海外研修や海外インターンシップ、英語による専門科目授業、外国人教員による授業、国際PBL（海外の学生と課題解決型学習）、留学生との交流、短期研修生の受入など、多様な取り組みを通して高専教育の国際化を推進しています。

函館高専では、アジアやヨーロッパの教育機関と学术交流協定を締結し、本校学生の海外派遣と海外からの短期研修生の受入を積極的に進めており、令和7年度は両者とも過去最多となりました。

■本校学生の海外派遣事業

高専機構は、学生が海外で学ぶ機会を広げるため、渡航費の一部を補助する「海外活動支援金」制度を設けています。本校では、海外協定校や他高専とのネットワークを活かし、学生が安心して参加できる研修プログラムを積極的に展開しています。

海外研修では、自分で設定したテーマをもとに現地で調査を行う「グローバル探究研修」（シンガポール、モンゴル、台湾）をはじめ、グローバルエンジニア特待生を対象とした海外研修（タイ）を今年度初めて実施します。そのほか、半導体人材育成サマーキャンプ（台湾）やサイエンスフェア（タイ）など専門分野に関連する研修に参加する学生や、アフリカの社会開発課題解決を目指す「高専オープンイノベーションチャレンジ2025」で最優秀賞を受賞し、セネガルでの現地実証実験に参加した学生もいました。今年度の海外研修参加者は合計69名になる見込みです。

また、海外インターンシップには、本科4・5年生が5名（ベルギー、シンガポール、台湾）、専攻科1年生が1名（フランス）が参加し、異文化の中で専門分野の研究に取り組み、現地の指導教員や学生との交流を通して、研究力とコミュニケーション力が磨かれました。

帰国後に実施した海外研修報告会では、参加学生が研修内容や現地で得た成果を発表し、質疑応答にも熱心に答えていました。報告会には、海外研修に関心を持つ本校学生だけでなく、同日に開催されたオープンキャンパスに来場された中学生やその保護者の方にもご参加いただきました。



グローバル探究研修（モンゴル）



海外研修報告会（12月）

国際交流報告

■海外短期研修生の受入事業

本校では、専門分野での研究や、中国語・英語の授業実践を目的としたインターンシップとして、ベルギー、フランス、シンガポール、台湾の協定校などから計20名の短期研修生を受け入れました。研修生たちは、授業や学校行事、課外活動に参加するほか、同じ研究室に所属する5年生との協働やインターンシップ報告会での発表などを通して、さまざまな場面で交流が生まれています。また、本校には、マレーシア、インドネシア、カンボジア、タイ、モンゴルなどから11名の長期留学生在籍しており、オンキャンパスの国際化も一層進んでいます。

また、昨年度に「道南の防災」と「再生可能エネルギー」をテーマとして実施したKOSEN Global Camp（2025年3月）に引き続き、今年度は、モンゴルから招聘した学生や教員らとともに「海洋技術」と「海洋資源」をテーマとしたサマーキャンプ（2025年8月）を開催しました（JSTさくらサイエンスプログラム）。本校の学生も積極的に参加してくれました。

来月4月には、協定校であるタイ高専（KOSEN-KMITL）から約5名の学生が本校を訪問する予定です。ワークショップや授業参加などを通して互いの文化や学びを共有し、より深い交流が生まれることを期待しています。



インターンシップ報告会（台湾研修生）



インターンシップ報告会（シンガポール研修生）



サマーキャンプ（魚の三次元構造観察）



サマーキャンプ（イカ釣り体験）

■みなさんへのメッセージ

高専生にとって、長い夏季休業（約1か月半）と春季休業（約1か月）は、自分を大きく成長させる絶好の機会です。思い切って海外に飛び出し、新しい文化や価値観に触れてみませんか。教室では得られない学びや経験がきっと未来への大きな一歩につながります。

春潮寮通信

寮務主事 臼田 悦之

本年度も残すところわずかとなりました。春潮寮本棟は経年劣化が進んでおりますが、昨年度同様、寮生が少しでも快適に過ごせるよう、寮環境や給食の改善、居室へのエアコン設置の可能性などに取り組んでまいりました。コロナ禍以降変化してきた寮文化の中で、やさしさと温かさを大切に「新しい時代の寮」を目指し、寮生会役員を中心に様々な取り組みが行われています。本年度実施した寮関係の主な行事を以下に紹介いたします。

◆ 入寮式・新入寮生ガイダンス（4月6日）

- ・第1学年男子23名・女子9名、第4学年2名、留学生5名、専攻科生2名の計41名が入寮。
- ・入寮式後には丁寧なガイダンスを実施し、新入寮生の不安を和らげる機会となりました。

◆ 1年生と寮生会役員との親睦会（4月8日）

- ・鳴海寮務主事補の発案により、自己紹介とグループゲームを通じて交流を深めました。
- ・SNSの使い方についての説明も行い、責任ある行動や他者への配慮について学びました。

◆ 新入寮生歓迎全寮集会（4月10日）

- ・全寮生が第一講義室に集まり、新入寮生と在寮生の初顔合わせを行いました。
- ・男子寮総代・女子寮総代から歓迎の言葉が述べられ、新寮生会役員の紹介も実施。
- ・新入寮生は一人ずつ自己紹介と抱負を発表し、和やかな雰囲気の中で歓迎されました。

◆ 1年生対象一斉学習（4月21日開始）

- ・学習習慣の定着を目的に、研修室での一斉学習を開始。
- ・授業期間中の月曜～木曜夜に実施し、仲間と共に学ぶことで学習リズムを身につけました。

◆ 春潮寮スポーツ大会+焼肉（5月10日）

- ・体育館でバスケットボールやドッジボールを行い、学年間の交流を促進。
- ・夕方には本棟玄関前で屋外焼肉を実施し、寮生同士の親睦が深まりました。

◆ 春潮寮防災訓練（5月14日）

- ・火災・災害時の避難経路や防災設備の確認を行いました。
- ・集団生活における「安全」の重要性を再確認する機会となりました。

◆ 寮生会定期総会（6月19日）

- ・全寮生が出席し、昨年度決算および本年度予算を審議・可決しました。
- ・各行事に使用する寮生会費が正式に決定されました。

◆ 寮祭（11月15日）

- ・寮祭実行委員会を中心に、学年・性別・国籍を越えたチームでバレーボール大会を開催。
- ・夕方には本棟玄関前で焼き鳥・焼きそばを提供し、交流を深めました。
- ・研修室ではコンテスト、カラオケ、抽選会（温泉入浴券あり）を実施し、寮生活の良い気分転換となりました。

◆ 寮生会役員選挙（1月22日）

- ・Teams・Formsを活用し、立会演説会動画の公開とオンライン投票を実施。
- ・次期総代・役員が選出され、男子総代に3C西出麻朗さん、女子総代に3Z藤巻紫音さん、会計監査に2Z村上瑛音さん・2Z竹内一花さんが決まりました。

残す行事は、寮生会定期総会（2月）と卒業生追い出しコンパ（2月）となりました。今年度は、寮生会役員による居室巡回の再開や屋外バーベキューの実施など、コロナ禍前の活気を取り戻しつつ、新しい寮の在り方を模索した一年でした。寮生同士、時には意見の相違や悩みもあったことと思いますが、そうした経験は今後の成長に必ず役立つものと考えております。

保護者の皆様におかれましては、今年度も寮運営に多大なるご理解とご協力を賜り、心より感謝申し上げます。



国際棟通信

生産システム工学科情報コース 5年留学生 ケビン

春潮寮の国際棟での生活は、私にとって高専生活の中でも特に印象深く、かけがえない経験でした。入寮当初は、新しい環境や共同生活に不安もありましたが、今振り返ると、その一つ一つが自分を大きく成長させてくれたと感じています。特に好きだったのは、春潮寮ならではの人のつながりです。新しく入ってきた学生を、みんなでラッキーピエロに食事に連れて行き、自然と会話が生まれるあの雰囲気がとても温かく、印象に残っています。また、寮ではそれぞれの国の料理を作り合いながら、文化や考え方について語り合う時間がありました。深夜まで続く何気ない雑談、ユニット内で映画を一緒に観た時間、時には卓球をして盛り上がったことなど、日常の一コマコマが今では大切な思い出です。

特に同じユニットの寮生たちには、心から感謝しています。慣れない高専での生活の中で、困ったときにはいつも支えてくれ、相談にも親身になって乗ってくれました。国籍や文化の違いがありながらも、お互いを尊重し合い、助け合う関係を築くことができたことは、私にとって大きな財産です。

寮生活を通して、私は以前よりも自立心が高まり、精神的にも強くなったと感じています。共同生活の中では、相手を思いやる姿勢や、ルールを守りながら協力して生活することの大切さを学びました。意見や生活習慣の違いに戸惑う場面もありましたが、その経験こそが、自分の視野を広げ、成長させてくれました。

春潮寮には多くのルールがあり、自転車置き場が少し遠かったり、部屋の冷蔵庫が小さく他の部屋の冷蔵庫を利用する必要があったりと、不便に感じることもありました。しかし、生活に必要な設備は十分に整っており、特に北海道の厳しい冬でも暖かく快適に過ごせる環境が用意されていました。そのおかげで、勉強や日常生活に集中することができました。

さらに、スポーツ大会や追い出しコンパ、バーベキューなど、年間を通してさまざまなイベントが開催され、寮生活に楽しさと活気を与えてくれました。これらの行事を通して、学年や国籍を越えた交流が生まれ、多くの友人と出会うことができました。

国際棟には多くの留学生が生活しており、日常的に異なる文化や価値観に触れることができます。その中で、世界の多様性を実感し、自分自身の考え方も大きく広がりました。春潮寮での経験は、これからの人生においても必ず生きてくると確信しています。春潮寮の皆さん、本当にありがとうございました。

令和7年度進路状況について

進路支援室長 阿部 勝正

令和7年度の進路状況についてご報告いたします。今年度本科5年生全体の就職・進学比率は約66：34、専攻科2年生は87：13で、本科・専攻科共に就職を希望する学生が多い年となりました。まず就職について、例年道外に就職する学生がおよそ8割を占めていますが、その一方で業種を問わず道内企業からの求人も多くいただいております。一例を挙げると、半導体メーカーの道内進出・拠点化、それに伴う関連企業・研究機関の進出によって求人も増加傾向にあるなど、道内就職を希望する学生の皆さんはこれまで以上に選択の幅が広がる可能性が大いにあります。

次に、進学に関して本科生の進学先は本校専攻科はじめ北大など道内の大学、道外の国公立大学へ進学する学生数は一定を保っており、専攻科生が進学する大学院はこれまで進学実績のある大学院が中心となっています。特に今年度は長岡技科大・豊橋技科大への進学者数が大きく伸びました。本科生・専攻科生に共通して言えることですが、漠然と進学先を決めるのではなく、「大学で何を学びたいのか、卒業後のその先はどうするのか？」など、学ぶ目的や将来設計を熟考した上で進学先を決定する学生が増えてきているように感じられたことは大変頼もしい限りです。なお、本校ではさまざまな大学の説明会を開催していますので、少しでも興味・関心を持った大学があればぜひ参加してください。大学の新しい魅力を発見できるチャンスになりますよ。

最後に、本校を卒業して就職する人、大学・大学院に進学したのち就職する人さまざまですが、皆さんはいずれ職に就くことになります。日本では生産年齢人口の減少など様々な要因による人材不足が問題になってから早10年以上経過しましたが、未だそこから脱せていない状況にあり、今後も求人数の更なる増加が予想されます。それ故、就職を考えている学生にできるだけ早い段階から自社認知をしてもらい、人材獲得も視野に入れたインターンシップや早期選考を実施する企業が増加し、併せて内定をいただく時期も早まってきました。こうした傾向に対応すべく、本校では低学年次からのキャリア教育にも力を入れています。例えば、人事・技術担当者を招いた企業インタビューやインターンシップ、本校体育館での企業説明会の実施などがありますので、そうした機会を積極的に活用して悔いのない就職活動ができるよう進路支援室は皆さんをバックアップしていきます。



歩んできた日々感謝を込めて

一般系 白田 悦之

平成17年に採用されてから21年間、函館高専で多くの皆様に支えられながら歩んでまいりました。この場をお借りして、長きにわたり温かく見守ってくださった教職員の皆様、そして学生の皆さんに心より感謝申し上げます。

着任した当時、校内の雰囲気、教職員の皆さんの働き方、学生たちの活気——そのすべてが新鮮で、これから始まる教員生活を思うと身が引き締まる思いでした。当時は国立高専の独法化に伴い、本校も教育改革を進めJABEE認定の準備をしている真最中だったためか、教職員の皆さんはすごく頑張っているなという印象が残っています。

学生との関わりの中で心に残っていることは数え切れませんが、CALLをはじめとするICTを活用し、授業の工夫を重ねてまいりました。マレーシアやシンガポールの提携校との交流では、学生たちが言葉や文化の壁を越えて心を通わせ、帰国後も交流を続ける姿に胸が温かくなりました。また、コロナ禍が始まった年に担任を務め、入学式が突然中止となり、ホームルームも授業もすべて遠隔に切り替わったあの混乱の日々は、今でも忘れられません。学生たちが不安を抱えながらも前に進もうとする姿に、私自身が励まされました。

教育環境の整備にも力を注いできました。着任当時は語学演習室、いわゆるLL教室がありました。が、機材の老朽化や授業形態の変化に対応するため、機器の選定、予算の調整、運用方法の検討などさまざまなハードルを乗り越えながらCALL教室へと改修しました。学生たちがより良い環境で学べるようになったことは、私にとって大きな喜びでした。

この21年間、担任8年、一般科目主任・一般系長5年、学生委員会3年、教務委員会1年、寮務委員会4年（最後の2年間は寮務主事）、他様々な委員会と、多くの学校業務に携わらせていただきました。どの仕事もやりがいがあり、教職員の皆様、また学生とともに一緒に過ごしてきた時間は、私にとってかけがえのない財産です。

さて、時代の移り変わりとともに、学校も大きく姿を変えてきております。中庭の桜や木々は見違えるほど成長し、スマートフォンが日常に溶け込み、コロナ禍では生活様式が一変して、やがて元の活気を取り戻しました。さらにAIの登場によって、研究や教育の可能性はこれまで以上に広がりつつあります。

これまでもそうですが、これからも本校が様々な逆境を乗り越え、発展し、学生一人ひとりの未来を力強く支える場であり続けることを心より願っております。私自身、多くの方々に支えられ、今日まで歩んでくることができました。深く感謝申し上げます。

長い間、本当にありがとうございました。皆様のご健康とご活躍をお祈りしつつ、感謝の思いを胸に、締めくくらせていただきます。

学生の皆さんにおかれましては、函館高専魂の「汝が夢を持って 大志を抱け 力強かれ」を胸に秘め、日々自分を磨いていくことを心より願っています。

新任職員紹介



浅野 千尋
総務課人事係・事務補佐員
令和7年7月28日採用
趣味：手芸

はじめまして。令和7年7月28日より、総務課人事係に事務補佐員として採用いただいた浅野千尋と申します。学校の事務補佐員というお仕事に携わるのは初めてなので、日々の業務に緊張しつつも楽しみながらお仕事をさせていただいています。まだまだ未熟者ではありますが、少しでも皆様のお役に立てるように一日一日コツコツと精進して参ります。どうぞよろしくお願いいいたします。

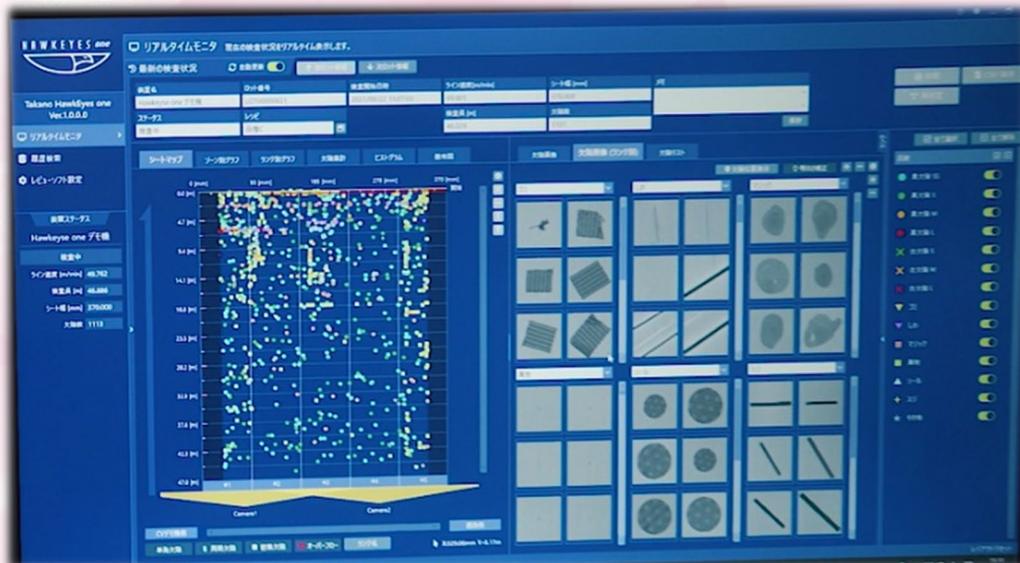


函館高専地域連携協力会から



- 企業名 : タカノ株式会社 函館事業所
①設立年月日:平成6年2月4日(事業所設立)
②代表者氏名:鷹野 雅央
③企業紹介

タカノ株式会社 函館事業所は、各種フィルム製品の検査を担う拠点として、業界最速クラスの処理機と高性能カメラを活用し、外観不良・異物・キズ・シワなどを高速かつ高精度に検出します。
最先端のモノづくり現場を品質面から支える検査パートナーとして、要求水準の高いものづくりに貢献しています。



本校公式ソーシャルメディアのご紹介

本校では4つの公式ソーシャルメディアを運用しています。
これらの公式ソーシャルメディアは、在校生とその保護者、及び本校への入学を志望者とその保護者が 本校の理解を深める機会を提供することを目的としたもので、本校の様々な活動や魅力等を発信します！

本校ソーシャルメディアサービス運営方針は[こちら](#)



函館高専



函館高専図書館



学校だより 第221号 令和8年3月発行
発行 函館工業高等専門学校広報委員会

〒042-8501 函館市戸倉町14番1号
TEL：0138-59-6412
FAX：0138-59-6330